

後深草天皇御製

題しらす玉葉集

石清水ながれの末のさかゆるは心の底のすめるゆゑかも

東二條院入内のをり聞えさせ給ひける増

夕ぐれにまつぞ久しき千歳までかはらぬ色の今日のためしを

伏見殿へ御幸し給ひける日關白兼平「伏見山い

くよろづ代も枝そへて榮えむ松の末ぞ久しき」

と奏しける御返し同

榮ゆべきほどぞ久しき伏見山おひそふ松の枝をつらねて

龜山院御集

詠百首和歌 弘安御百首

春

四方の海浪をさまりてのどかなる我が日の本に春は來にけり
 谷風にい はまの氷うちとけて春とは浪のおとにたつなり
 おほかたにかすまぬ色もなかりけりいはとの關のはるの通路
 あらたまの春まちえたる空にさへこぞみし雪の消えぬ野邊哉
 もろ人の野澤の水に袖ぬれてこほりのひまに若菜摘むなり
 やきすてし煙のすゑのたちかへり春春もえいづる野のさわかひはもえいづる野邊の若草
 梅が枝の花も氷やときつらむうぐひすのなみだいまだひなくに

梅が香をこづたふ枝にさきだてて花にうつろふうぐひすの聲
 そことなきうはの空なる梅が香のほひもあまる春の夜の袖
 春風や柳のかみをけづるらむみどりのまゆもみだるばかりに
 かすめどもまだ春風は空さえて花まちはほにふれる沫ゆき
 みわ山をたちかくせども春がすみ緑はしるき杉のむらだち
 へだてつる霞のうちもかすむかな雲をかさぬるはるさめの空
 いまはとてなれしみやこを行く雁の涙をそれとはるさめぞふる
 世のためも風をさまれと思ふかな花のみやこの春のあけぼの
 白雲はよそにかかりてかつらぎや花ぞ高間のみねのはるかせ
 雲とみる花の木のままをもる月やはるはおぼろのかげとなるらむ
 あかでこそ後もたのまめ山ざくら花の名だての人のこころに
 あだならぬ神のいがきに咲く花も誘ふ風あればうつろひにけり
 春くるる山のやまぶき八重までにはねど花の色にでにけり

夏

枝かはす松のしづえをこえてこそ卯月にかかれ池の藤なみ
 わぎもこが薄きころもの夏山はこすゑにいまぞ風もまたるる
 卯の花の色やまがはむゆふぐれはみどりの竹にかけしころもに
 ときはなるその神山のあふひ草おなじ二葉に年をふるかな
 あさくらや木の丸どののゆふぐれにわがなのりする時鳥かな
 ほととぎす鳴きぬばかりに橋のかげふむみちをまたすぐるかな
 あやめ草いつの五月をひきそめて長きためしのねをもかくらむ
 さみだれもはれぬしほやの夕煙たえぬやあまのうらみなるらむ
 あづまやのまやの軒端のみじか夜にあまりほどなき夏の月かけ
 夏もまだ月日ほどなきみそぎ河年のなかばやさても過ぎなむ

秋

けさかはる秋とは風のおとは山おとに聞くより身にぞしみける

あすか風いたづらに吹くよひよひに秋ぞこととふたをやめの袖
 ひと夜のみたえぬばかりか天の川その年月のなかのへだてを
 かなしさは人の心もいかならむわがためならぬ秋ぞと思へど
 いへばえになほもの思ふゆふぐれの露は涙のゆかりなりけり
 散りにけり鹿鳴く野邊のこはぎ原下葉の色もみぢあへぬに
 秋風に鹿なく山のゆふぐれはわれも涙のなほこぼるらむ
 物をのみおもひつらねてゆく雁の涙やつゆの数を添ふらむ
 きりぎりす枕かたしくよひのまも秋と忘るるねはなかれけり
 おしなべて月やひとつにやどるらむ花の千ぐさの秋の白露
 月夜よし夜よしとぞいふわがやどの河おとすめる山の嵐に
 もろともに思はむ人にちぎらばや身にそふかげを月になしても
 残りける秋の日数をかぞへつつ霜のよなよなうつころもかな
 日かげまつほどばかりとや咲きぬらむきりのまがきの朝顔の花

咲きまじる千種の花は霜がれて菊ばかりなるにはのいろかな
 枝かはすよそのもみぢのくれなるに緑を添ふる松のひとしほ
 もみぢばもゆふる雲にうつろひてなべてそめける秋の空哉
 紅葉ばの下ゆく水にかけ見えてちらぬ梢ぞねにかへりける
 もみぢ葉はとまるおせきによどめどもしぐれて過ぐる水の秋哉
 なべてよの人もや袖をぬらすらむけふばかりなる秋の夕ぐれ

冬

神無月しぐるるあとのゆふひかけ秋にも似たる今日の空かな
 いつしかと霜こそむすべをさき原冬の日数のひと夜ふた夜に
 かみな月曇らでふるやまきのやの時雨にたぐふ木の葉なるらむ
 散りまよふ紅葉のいろに山もとのあけのそほ舟なほこがるらし
 木の間もるかげだになくてふけにけり中空にすむ冬の夜の月
 あしかものたまもの床のうき枕さだめぬ浪にまかせてぞゆく

にほの海やみぎはの千鳥こゑたててかへらぬ浪に昔こひつつ
昨日今日都の空も風さえとやまの雲にゆきはふりつつ
松ならでつれなき色と見ゆるかな冬の林にふれるしらゆき
山がつの垣根に春も近ければ年のうちより匂ふ梅が香

戀

思ふよりさきだつものは涙にてこひのしるべぞまたなかりける
下にのみ思ひそめぬるゆふしぐれつひに心のいろは見えなむ
たれゆゑにみだれそめけむあぢきなく心のおくの忍ぶもぢすり
わればかりしのぶるなかにものはおさふる袖の涙なりけり
海山のはてもこひぢと思ふにはあはれ心をいづちやらまし
富士のねの煙のすゑはあともなくともゆる思ぞ身をもはなれぬ
身のうさを歎くなみだやくもるらむ月だに袖にかげもやどさず
から人の衣そむらむむらさきのゆかりの色のなつかしきかな

たのめてもまたいつはりに習ひけり浅き影みる山の井のみづ
さのみやはつらきなげきもつらからむ心にかなふ思なりせば
ながらへばさてもあふよのたのみとて猶惜まるるわが命かな
ながらへてあればわが身の思出にうき言の葉もなさけなりけり
年月のあはぬつらさをかさねても猶たちかへる袖のうらなみ
よしさらばこれをわが身の思出にあふにかへなむ後の名もがな
しらばやなあはれわがみの後の世をさのみつれなきものは思はじ
思ひわび衣かへしてねぬる夜の夢やまさしくあふとみるらむ
忘れじと今日までちぎる言の葉も身にしられぬは心なりけり
めぐりあはむその曉もいかならむわれにつれなき有明の月
おなじ世に見しはうつつもかひなくて夢ばかりなる人の面影
身にすればわれやひろはむおほとものみつの濱なる戀わすれ貝

雜

かたしきの夢のなごりもあけやらで霜よりひびく曉のかね
 わがためにかくて千歳はすぎななむ契をむすぶいはしろの松
 契りおくちとせこもりてくれたけの葉かへぬ色の世世をふる哉
 龜山の千歳のかげにすむ池のここのすさきに田鶴ぞなくなる
 くさかえの入江の田鶴ももろこゑに千代に八千代も空とくになくなり
 かざしをるみわの檜原の杉の葉や年ふる色のしるしなるらむ
 あきらけきわがよのかげと頼むかな月日の出づるせきのあなたを
 あふぎ見る空なる星の數よりもひまなきものは心なりけり
 さてもげにながらの橋のながらへて世を渡る身ぞくるしかりける
 津の國のなにはのあしの世の中をのどかにとイニナシと思ふわが心かな
 我が身こそ朽木のそまのいたづらにひく人なくて世にはまかすれ
 立ちわかれ日數へぬれば旅衣つゆわくる野は袖もかわかず
 春秋の日數も遠くへだてつつゆききになるる白河のせき

世のうさを苔のみだれの露わけてとふ人もなき秋の山里
 みやこにて空にただよふうき雲ののきばの山にかかるゆふぐれ
 世のために身をばをしまぬ心ともあらぶる神はてらしみるらむ
 すべらぎの神のみことをうけきつといやつぎつぎに世を思ふかな
 神風や伊勢の少女が袖たれていのるひつきにわがよやすけむ
 石清水神の心にまかせてやわがゆくすゑをさだめおきりむは
 いつはりのなき世ならねばわがたのむ神ぞただすの森のしめなは

詠百首和歌

昭慶門院より被出之

早春

いまよりはのどけかるらし春日山さすや朝日も春のけしきに

嶺霞

春といへばみねの霞はたちながら山はあらしの猶もさえつつ

野霞

のぼりにし霞のすゑを思ふにもうきは嵯峨野のきさらぎの頃

子日

ひきうゑし松は木高きやどなればまたや千歳をけふにはじめむ

残雪

この里はさこそは雪も残るらめ山のをぐらのかげにまかせて

若菜

みやこ人いかがはすらむ山かげの野澤の若菜はるあさきいろ

竹鶯

曉のこゑこそ通へうぐひすのねぐらの竹はよのまこめつつ

曉梅

あけやすきなごりぞをしき春の夜の夢より後の梅のにほひは

夕櫻

みる人の心もさぞなつきぬらむ花もかつちるいりあひのかね

春雨

いまはまた頼むかげなき我が身にも心ぼそきははるのあめかな

春曙

花のいろ鳥のこゑをも聞きそへてげに世に知らぬ春の曙

春月

春の夜は月のとがとはくもらぬを霞やなかのへだてなるらむ

歸雁

歸る雁涙を知らぬゆふぐれは聞くわれのみぞまづなけれける

河柳

春風やなみにまかせむかたよりに古河やなぎいともみだれむ

山花

うつし植うる山は吉野の花ながらかかるためしはあらしとぞ思ふ

里花

花みむも我れや都へいでなましとてもかくても山に住む身は

落花

花の色は春の光にうつろひぬあかぬこころの何に添ふらむ

隣藤

枝かはす人のかきねの藤の花わがまつことは今はなき身ぞ

歎冬

世のなかの人の心の色みせて春たくるとも咲けややまぶき

暮春

今日くれてあすだに知らぬ世のうさにかたがた惜しき春の暮哉

首夏

この頃は卯月のみしめひきはへてところどころに神まつるなり

卯花

いざよひの月はいりぬるなごりにて卯の花籬にかげぞとまれる

郭公

ほととぎす頼めぬ音をもとしどしに何と苦しくまちならひけむ

花橘

長月の菊のまがきに露きえて香をこそしたへ軒のたちばな

梅雨

五月雨の晴れぬ日數にいひなして今年ほさじ墨染の袖

夏月

みじか夜のまやの軒もる月かげのほどなくあくる夏の空かな

夏草

夏草のことしげかりし昔にもあらずさびしき山のおくかな

澤螢

身にたへぬおもひは誰れもあるものを澤の螢のいかにもゆらむ

納涼

さすがまた都にも似ぬけしきかな秋をもまたぬ松のあらしは

夏祓

うきことを何にたむけむみそぎ河神もゆるさば夏はらへせむ

初秋

なにとなく驚かれける風の音もげに思ひしる秋のそらかな

七夕

たなばたの心ながさはためしにてたれ白絲をかしはじめけむ

簷萩

ささがにのやどりくるしき白絲のすすろみだるる萩の上風

萩露

秋萩のうつろふかたのした露やものおもふ人の涙なるらむ

岡薄

水ぐきの岡のやかたに風過ぎてひとむら薄たれまねくらむ

籬槿

世のなかは夢かうつつか朝顔の花のまがきの露のよすがも

刈萱

ひとかたになびきもはてす刈萱のただこのごろの人心かな

夜蟲

長き夜のおもひありともなく蟲のこゑぞ枕にかつかよひける

朝鹿

旅人のあさたつ野邊は霧こめて尾上の鹿はみねに在るなり

秋夕

もの思へとたれかならはず秋ぞとてゆふべをわきて涙おつらむ

初雁

かへるさに今年もききし雁ぞかし秋の日數ぞいまたりぬる

待月

まつほどのこころはれぬる我が身にはいでぬに見ゆる月の面影

見月

みな人のこころごころに月をみば曇らぬ影もくもるとやいはむ

惜月

あやにくに惜しからぬ身に惜まるる月はいりかたの秋の山の端

海霧

わたつ海のとわたる舟のゆくへしもほのかになりぬ霧の遠方

擣衣

もの思ふとねられぬ賤がなぐさめに幾夜重ねて衣うつらむ

垣葛

秋風にたれかうらみとよろふらむ葛はふ垣の中のへだてを

紅葉

露霜にたへぬ木の葉やかつがつもりぐれをまたず色に出ぬらむ

谷菊

幾秋も老いせぬ菊のかげとめて千歳すむべき谷の下水

暮秋

かぎりある秋よりほかにゆめとみし長きわかれの長月の空

初冬

わればかり身をやつしぬるふち衣人は冬とやたもとかふらむ

時雨

とにかくにもろきなみだの神無月袖より山にしぐれゆくなり

落葉

大井川るせきの水のくれなるにわれとあつまる峯のみちば

路霜

わけすぐる道のささ原冬きては霜こそむすべひと夜ふた夜は

水鳥

をしかもの住む池水はさゆる夜もおもひありとや氷らざるらむ

千鳥

さびしくてかたらふ人もなき身には友なし千鳥我れにこと問へ

冬月

山高くつたふる木の葉ちりて後まほにぞ月のかげやとしける

浅雪

風さえて枯野のすすき雪ちれば残る尾花ぞ敷まさりぬる

深雪

わけわぶる谷の細道けふしこそ路ありけりと雪つもりぬる

歳暮

うきことの日數に添へてつもりぬる今年のくれは惜まれぬかな

初戀

まだ知らぬ戀はいかなる涙ぞとうさになれぬる袖に問はばや

忍戀

つつむとて下の思のよわらばやげに世を忍ぶこころなるべき

顯戀

くれなるもなみだの色のあらはればいつはりもなき心とは見む

見戀

かぎりなき心うつりて面影を見るはおもひのます鏡かな

聞戀

なかなかありとはききてあはぬ夜は幾度心ゆきかへるらむ

増戀

昨日より今日はあだなるわが涙いまいくかありて袖のたきつせ

近戀

いかがせむ心のうちのへだてをば枕かはしてあまたねつれば

遠戀

から國の知らぬさかひを隔つともかよふ心のすゑはあひなむ

契戀

ゆくすゑはいかに契るもたのまれすただ目の前にかはる心は

悉戀

この世にはいつはりもせぬ身と知らばわが言の葉ぞ人も頼まむ

待戀

たのめしも人はなげなる言の葉をわれや忘れすくれを待つらむ

逢戀

ひと夜とぞわが逢ふことを祈りしにまたこの後に何となげかむ

別戀

かぎりあれば袖の涙もつきぬらむ身にはじめたる別ならねど

恨戀

なつかしく思ひしなかの變るとて恨めしといふ人はあらぬか

稀戀

たなばたもたえぬひと夜はよがれせず三年に見つる君が面影

厭戀

いとほるる身の上知らぬ涙こそさもあやにくに心よわけれ

隠戀

面影を雲のいづくに宿すらむそらがくれする有明の月

隔戀

あはれげにしらばや人の言の葉をこころの底のいくへありとも

久戀

こひわたるその名ばかりはかひもなし長柄の橋の昔ながらに

絶戀

かた糸の絶えなばたえねなかなかに逢ふをあふとも頼まれぬ身は

曉 鶏

よなよなの曉深きねざめにはわれより後ぞ鳥もなきける

晩 鐘

あさましやうちまどろめば今日もまたくれぬと鐘の音ぞ聞ゆる

夜 燈

このよには消ゆべき法のともし火を身にかへてこそ我れは照さめ

庭 松

いろかへぬ宿のかざしとなりにけり庭にむれたつ松の一村

窓 竹

うきふしを知らぬやどにて過すとも思ふかたには靡け吳竹

名 所

音に聞くよもぎが嶋のあととめて龜の尾山にわれ家居せり

故 郷

春を待つ日數もいまは近きかな吉野の宮のうしや世の中

山 家

すみなるる山のおくなる家居には都ぞ旅の心地なりける

幽 栖

おとづるるたよりもさびし人ならで寛の水と山のあらしと

羈 旅

あづまちは聞きても遠き旅なれど心のおくはへだてなきかな

旅 泊

いづくをかさしてとまりと思ふべきうきたる舟の風を待つ身は

眺 望

春の花秋の紅葉のいろいろもところからにぞをりを知りける

孤 夢

うき事も身の思出もすぎぬれば夢ならでやは昔みるべき

寢 覺

長き夜もまどろまでかつあけぬればいつを寐覺の心地だにせず

述 懷

かはりぬる身はわが身とも思ほえず世はよにまさるひとこともなし

懷 舊

忘れず過ぎにし事はかすかすによその事まで思ひ出でぬる

無 常

春と秋とひだりも右もぬるる袖わがふた親のなき月日とて

神 祇

ゆくすゑもさぞなさかえむ誓あれば神の國なるわが國ぞかし

釋 教

まよひつる人を導くたよりなる佛ののりはわが言の葉よ

祝 言

すゑ遠き千世のためしの姫小松なほ榮えよと契りおくかな

詠百首和歌

殘闕

閑居早春

時わかす世のはえもなき山の奥はわれとぞ春を思ひなしける
たづねとふ人はまれなるわが宿にところきはす春ぞきにける

處處子日

ゆくすゑをけふの子の日に契るかな千歳の數もあまたところに

橋上霞

おほる河すゑなるはしはな絶えて霞ぞわたる春のかよひ路

野若菜

すみなるる春のさが野の若草をゆききの道に今ぞつみける

鶯留客

言問はで過ぎゆく人は鶯のなきても告げよなさけありとは

梅風遠薰

いろ見えで幾里こえて知らるらむ梅咲きぬとは春のやまかせ

苔庭残雪

山かげの苔のみどりのあらぬ色にさえて残れる庭のしらゆき

河春月

ひさかたの月の桂のかは水もおぼろなればや春をしるらむ

幽閑春雨

静なるわがやどがらの思ひなしになほ過ぎてこそ春雨はふれ

岸柳曳浪

みどりなる岸の柳の池水にうつるすがたに浪ぞかすそふ

花満山

こころざし深くうゑける山ざくら松よりしげく花をみるかな

いろふかく植ゑおくはなの年ふりて二句賦やまざくらかな

落花埋路

ふみわくるあとだに見えず櫻花あまた木御木ノマすゑちりつもりつつ

ふるさとの面影さへぞ忘れぬる花にまよへる志賀のやまみち

山吹浮水

やまぶきの花をうつせる水の色のちとせすむべき井手の玉川

松外藤

色そへてかざりし松をよそにしてわればかりなる藤のむらさき

枝かはす松を賦ふちなみのはるのすゑ葉に咲きにける賦

老後暮春

あいまはわれ老いぬる年にまげくかたはれわが今は老とやなげかまし四そちの後の春もいつたび

忍戀二首

あぢきなくしのぶしのぶといつまでか戀にわが身を添へて歎かむ

なかなかに心はあだとなりにけり思ひいれずば忍びはてまし

逢戀二首

あふみなる山御本ノママをけふこひて後もくるしくわがなげけとや
なかなかに侘あひみずてとしつきへけさこころよりしきものをあひそめて歸らむと思ふほどの名残は

契戀二首

契りおく事はたがはであひ見ばやわが世も知らず人の身もいさ
さすがまたいひし月日とこをしらるるはわがいつはり人に人

別戀二首

面影をふたつにわりします鏡これやかぎりのためしなるべき
見るたびにこれや限にありあけの月御本ノママもよしとかへるまのみる

絶戀

ゆくかりのつらをはなるるひとめをも絶えても絶えぬ契とぞみる

旅

いまは我れ野にも山にもすみなれて都ぞたびのこちなりける

述懐

とにかくに思へばものの思はれて思ひいれねば思ふことなし

祝

ちはやはよるづいやぶる神のさだめむわが國は動動かすものかじものをあらがねの土

詠十首和歌

山霞

いとどまた都を遠くへだつらむ山は霞の名にたてるはる

谷鶯

もろともに世をはるならぬ心地して谷の戸いでぬ鶯のこゑ

梅風

たちよらば袖にありかを吹きとめて匂をうつせ梅のしたかせ

歸雁

春秋をおなじみやこにかへつれば今やこしちの初がりのこゑ

待花

咲きなばと思ふばかりの氣色にてげに花咲かぬ山櫻かな

忍戀

よしやただわが心をば我れぞ知る人のためには何しのぶらむ

逢戀

何とこの逢ふはあふにてさてやまで見るにもおつる涙なるらむ

別戀

うしといふ有明の空の月なくばおもかげとめぬ別ならまし

述懷

世の中に思ふことなきわが身かなとてもかくてもあるに任せて

祝言

龜の尾の岩根の瀧の白絲の知らずこの後いくよへむとも

詠五首和歌

庭夏草

ふみわけてとふべき人もなき身にはやどがらしげる庭の夏草

夕蟬

思ひいづやことしげかりし昔をも夕ぐれ急ぐ蟬のこゑには

雨後納涼

降りつづく雨はれぬらしゆふぐれの苔の袂にかせかよふなり

寄螢戀

よそにやは螢をも見むゆふぐれのもゆる思もわれやなになる

寄道釋教

つねにゐるはちすの上の心をやまだ知らぬ人は玉とあざむく

詠十首和歌

朝霞

峯こえて空にかすみはうづめどもよそにうつろふ朝日影かな

子日祝言

君がためいかにいかはむ姫小松なべて子の日の松の千歳を

五月雨久

面影も忘るばかりに雲とちてこの月はみぬ五月雨のそら

蟬聲近

はるかなるかた山陰の木づたひを風にききよるひぐらしのこゑ

樹陰納涼

やほかゆく外面の木かげたちよれば秋吹きぐして風ぞすすしき

水鳥馴

みづとりの夜はうは毛の霜ぞかさねけるつがはぬをしのよその衾も

寄星戀

秋の夜もながしといはぬためしかな二の星の一夜まちえて

寄川戀

せく袖のつつむにあまる思川思ひぬるめはたえずこそゆかめ

寄鳥戀

あぢきなやわれは短きこころにて山鳥の尾の長き戀をば

寄國祝

うれしくもとよあし原のよしよしとわがすするのまぼるべき國

詠十首和歌

新月透松

たちのぼるいでやらぬかげを(缺字)めくみゆるかな月より上の松のむら立

明月滿庭

こよひこそ世にみちぬらめ秋の色の曇らぬかげの月はひと庭

山月聞鐘

月すめばまたたが里ときこゆなり風のつてなる山おろしの鐘

河月浮舟

秋風の月のかつらのうかひ舟くだすか浪のせせさわぐなり

曉月近嶺

いでてさはつれなかるべき有明のこの山本はいりがたのかげ

月前忍戀

曇りなき影さへ身にはいとふかなあらはれぬ名を月によそへて

月前逢戀

あひみてもさてすみはてぬ月のかげ人のこころとわが命とに

月前契戀

おもひいでば身にそふかげと契りしに月ばかりなる聞のさびしさ

月前怨戀

ことうらの月をながめしこころより秋風さむしあさの衣手

月前絶戀

契りしもわが中空の浮雲のたえまたえまに月はへだてぬ

詠五首和歌

山月聞鹿

こよひこそ月にあらしの音すみて尾上に鹿のこゑおくるなり
山の端の雲はあらしにあとなくて月にみがけるさをしかの聲
すみのぼる聲もみやまを出でにけり月月おくれぬさを鹿の聲

河上見月

浪の上もひかりみちたる月影に河音すめる秋の夜半かな

大井河秋の上の川 つけゆく河の早き瀬をくだればのぼる月の影かな

庭月照菊

むすびおく露をば月のやどりにて光色をかきぬるそへたる庭のしらぎく

月下待戀

たのめねば偽とだに人をいはでわがおもひねの月ぞふけぬる

曉月別戀

鳥の聲かねのひびきにかへるさの月よりほかもわれ慕ふなり

詠十首和歌

月山中友

われのみぞみ山の秋もなれにける月のいでいる栖家しめゐて

月帶嶺雲

山の端をいでぬと影はみえながら月によこざる峯のしらくも

月向曉雲

長き夜も知られぬまでにふけにけりわく方もなく月をのみ見て

月動旅思

思ひやれば都ぞたびになりにけるわれにおくれぬ月の影見て

月催懷舊

かずとりてさのみや月にうれふべき身もあらぬよの昔語を

月顯忍戀

くもりなくて忍びはつべきちぎりかは空おそろしき月の光に

月増久戀

幾とせの秋をか経けむつれなさを月にかこちてながらふる身は

月驚絶戀

夜半の月みざらましかばたえはてしその面影もまたはあらしを

月滿枕戀

袖もひぢ枕もうきてなみだのみよもにみちぬる月の影かな
いかにして月をとどめむ中空にかはす枕のあきのひと夜を
月宿袖涙
ほしあへぬ袖のしたゆく涙がは月やどれとはちぎらざりしを

暮秋詠十首和歌

永仁元年龜山殿の十首

池亭暮秋

くれてゆく秋のあらしの山近くわがすみなるるやどの池水

山館暮秋

くれかか^{うつりゆく}るゆふ日の峯にやどとへばもみちのほかも紅のやま

幽居暮秋

さらばまた我が住む里のさびしさに知られで秋もよそにゆけかし

河上暮秋

大井川くれぬる秋の早きせをとりあへぬさをに下すいかだし

古寺暮秋

秋はいま^{はやく}今日くれぬとぞおどろかすむかひの寺の入相のかね

林頭暮秋

夕しぐれ染めつる色をのこしつつ雲の林に秋はかくれぬ

野外暮秋

むすびおきし尾花が露もかれがれに野邊より山に秋はすぐなり

暮秋忍戀

ゆるしなき心のうちのなみだかな頃はもみちの色にいづれど

暮秋別戀

とどまらぬならひありとは慰めて秋もわかれぬきぬぎぬの空

暮秋懷舊

大宮院九月九日御かくれ也

九日のこぞのかざしはうけれどもいまは形見の庭のしらぎく

詠二一首和歌

庭落葉

梢をば風のさそふと見しかども庭はもみぢの山となりけり

河水

さす棹に浪もくだけて大井河こほりの瀬瀬をくだすいかだし

詠三首和歌

野冬月

さびしさは色もひかりもふけはてて枯野に霜の霜にのありあけの月

月影やさえたる色をさしそへむ霜のふる野のあけがたのそら

庭淺雪

人はいま庭の教のあさき世に身ぞうづもるるけさのしら雪

ふるままにみ山の松は枝たれて垣根は雪のまだあさきかな

契久戀

あはぬまに浪こしすぎて末の松まつぞひさしきちぎり残せる

契るともさのみやまたむ年月をわが世も知らず人のこころも

年へてもあふにかふべき契なれば知らぬ命になみだくらべむ

さだめなきしぐれはもとの時雨にてめぐりもあはぬ君が面影

大井川ところをかふる同じ名もひとつながれと君や汲み知る

栽花

おいらくの後の春とは知らねども今年も花は植ゑ添へてける

庭花

よそにみて知らぬあたりの花よりもやどがら惜しき山櫻かな

近花

植ゑおきし花は昔とにほひきてやどがらちかきあらし山かな

遠花

きさらぎや花かあらぬかかつらぎの雲こそかかれよそのながめに

寄花來戀

わすれにし宿とは知らではるばると花のこすゑに尋ねきにけり

寄花久戀

咲きそめてあだなる花御本ノマテにならせてつれなくすこす人心かな

已上六首短冊被遊之

山月聞鹿

山の端の雲はあらしにあとなくて月にみがけるさをしかの聲

河上見月

秋の夜のふけゆく川の早き瀬をくだればのぼる月の影かな

庭月照菊

結びおく露をば月のやどりにてひかり添へたる庭のしらぎく

月下待戀

たのめねばいつはりとだに人をいはでわが思寐の月ぞいでぬる

曉月別戀

後をまたむいのちも知らずかへるさの月も有明の心細きに

已上五首懷紙被遊之

籬菊

くれて行く秋の日かずのうつろふをまがきに残す白菊のはな

山紅葉

みやまべやしぐるる雲をわけいれば紅葉も秋も深く見えけり

龜山院御集

惜暮秋

わかれにし秋にことしもあひぬるを今宵ばかりと惜みかねつつ

契待戀

たのめずばただおほかたに待ちやせむわきて身にしむ入相の鐘

恨絶戀

恨みてもさすがなれにし面影のうかりしままに絶えむとや見し

已上九月盡五首懷紙被遊之

龜山嘉元仙洞御百首

春二十首

立春

かくしつ身はふりまさる宿にさて年新しく春ぞたちける

霞

山風はなほさむからしみよし野の吉野の里はかすみそむれど
面影や春の空はらもたちぬらむわきて霞の色はみえねど

鶯

吳竹のあけやすき夜を猶こめてねぐらの枝にうつる鶯

春雪

嘉元仙洞御百首

朝嵐に枝は氷れるみ山木の花まちつけぬはるのあわ雪

若菜

うちむれて人は行くとも身をすればわれ老らくに若菜つまめや

梅

移りける匂や袖にふかからむ軒ばの梅の花のしたかせ

おしなべて咲かぬ垣ねもかをりつつよそにみちたる梅の下風

柳

春風に柳の絲をみだるともかたよりならぬ心とをしれ

春雨

残りつる身の行末を思ふにも心細くもはるさめぞふる

歸雁

北にとぶ翼こそあらめ聲さへに哀をそへぬはるのかりがね

花

咲きぬやと思ふよりかつ忘られで心ぐるしき山ざくらかな
かつさきてまたる色もめづらしくたえだえみゆる花のむら雲
山のはに入日うつろふ紅のうす花ざくら色ぞことなる
春かせにさきぬる花の宮木守こころゆるすなやどのさくらを
命にもかへばやとおもふ心をばしらでや花のやすくちるらむ

春月

あかでなほくれゆく春の色とめて花の枝もるいざよひの月

藤

池水の緑も松にしたそへて梢にかかるきしのふちなみ

歎冬

山吹のたがあやまちに咲き初めて冬をばよそのいろとなしけむ

暮春

つくづくと彌生の頃の長き日もかぎりありてや春のくれぬる

夏十首

卯花

今よりのうづきにさけば卯の花と名にぞながるる玉川の里

郭公

神とるうづきのみしめたゆみなく神かけてまつ時鳥かな

時鳥なきぬとつぐる人のこゑにまことの鳥のねぞまたれける

時鳥なにかい心をつくすらむ我れきけとても鳴かぬものゆゑ

夏月

霜の上に雪をかさぬる色ながらあかぬや夏のみじかよの月

五月雨

はれやらぬ空に日数はかさなりて雲よりつづく峯の五月雨

廬橋

わすれすよ右のつかさの袖ふれし花橋やいまかをるらむ

螢

をしからぬ身を思ふにもかへなばや數みえてとぶよはの螢に

夕立

鳴神の空にひびきてすぎぬなりことあり顔のゆふだちの雲

納涼

涼しさやかつかつが下にかよふらむ岩こす水のあきのこころは

秋二十首

初秋

天つかせ空にたちつつあらがねの土の色にぞ秋もみえける

七夕

いせの海星合のあまの名ばかりにこよひぞなみのよるの契は

露

夕ぐれは結びやあまる置く露のしろき麻ぎぬま袖せばくて

萩

いとどまたおりてぞまさる秋萩花のにしきの花色ごころもつゆのたてぬき

萩

そよ更にあはれそへける風の音も秋をこめたる庭のをぎ原

薄

つゆかろきひとむら薄ほのかにも夕は誰れが袖とみゆらむ

秋 夕

秋といへば物思へとはむかしよりたがさだめたる夕ぐれの空

蟲

われのみと秋のひと夜を心にて世をはばからぬむしの聲かな

鹿

つたへける山はあらしのわが宿となれてもあかぬさをしかのこゑ

初 雁

さしていつとたのめぬ物の大空にかならずくるは秋の雁がね

月

山のはにいでぬ光をさきだてて西こそ月のかけは見えけれ
しばしだに心くもらぬ人もがな空なる月のはれ清きよに
花もをし紅葉もふかき色なれどよなよなみてもあかぬ月影
見る人の心にまづぞかかりける月のあたりの夜半の浮雲
しもとなる秋も有明の末の露もとみし心たれもしらじな

擣 衣

かりそめの賤が伏屋のひまをあらみ夜風さむしと衣うつなり

霧

行末はさしても見えじ川舟のうきてながれよ霧のをち方

紅葉

立田姫しぐれに色は見えねどもいかに紅葉をちちにそむらむ
はれくもりいくしほまでと夕時雨ぬれてそめほす山の紅葉ば

九月盡

秋の色は九つわきてすぎぬなり残る一夜のかげぞさびしひしき

冬十首

初冬

野べの色まがきの菊のうつろひも冬まで霜ぞむすびとめける

時雨

そめいでて木のはもあらし吹きすぎて空しき枝に時雨ふるなり

落葉

折りて見し紅葉の色にまさりけり唐錦なる山のしたみち

冬月

白妙の松のうは葉をみがきつつ雪をいただく山のはの月

霰

はげしくて夢をもやぶる風の音に霰ふるよは更にねられず

雪

いひふるすことは違ひて今年こそ年ゆたかにて雪はつもらね
積りけるほどもしられて吳竹のよのまにみゆる雪の下折
仰ぎみる君がよはひをゆづりても積るうれしき九重のゆき

千鳥

濱千鳥ひとのころもこと浦にむかしのあとをなくなくぞ行く

歳暮

かぎりある老はつもれる年の暮をよろこぶ人の身にはなきかな

戀二十首

初戀

かくとだにいぶきの山のいたづらにさしも思にもえそめにけり

忍戀

わがなをば袖にをさめてもらすなよ心にあまる涙なりとも
更にまた戀ひすぞあらむあぢきなく人目をそへて包む思は

不逢戀

よそならぬみをばかへして恨むべき我れにつれなき人の心に
思川末のあふせは渡るともまたでや消えむ波のうたかた
行末をたのむばかりに程やへむ猶かた絲のよるべならねば
あらましに我が命をばかへぬべし心のかよふ道をしりなば
たのめつつまた偽にくれはどりあやしやさきの上よの契は

待戀

あやにくにあはぬ夜がれのつもるより頼むる暮をまつや苦しき
たのめおくしるしもみえぬ夕暮はすぎのはかへて松風ぞふく

初逢戀

ことのはもあひみそめては忘れぬ嬉しさばかり身にとまりつつ

曉別戀

めづらしや逢ふとばかりの名のみして枕かはさぬ鳥のねぞきく

逢不遇戀

みしは夢つらさは今の現にて忘れずながらあはぬ頃かな
たちかへり待つよながらのあらましに別れし鳥のねもや變らむ
面影も今やいかにかにとなるみ濁しほひは遠くなりまさりつつ

忘戀

忘るるを人の咎とや歎くらむ我れと心のさまにたがひて

忍びしに思ひしらせよ忘るるも同じたねまく人のこころは
みくさゐる野中にみゆる忘水たえまたえまは流れだにせず

恨戀

なかなか人の人とも思はねば身を身にてしるうらみだになし
いはばやな恨みてきたる里の蟹の衣ほすまもなきと思へば

雜二十首

曉

しづかなる寐覺よ深き曉のかねよりつづくとりのこゑごゑ

松

徒にみののを山のまつこともなき我れながら年ふりにけり

竹

人こえにうきふしもなし吳竹の世のことしらぬ身はやすくして

山

ききてのみ現にはみぬうつ山ゆめにも見えす葛の細道

河

絶えせじなのちのさが野の行末をとみの小川のながれあまたに

橋

きき渡る我が身ながらも耻しや橋ばしらさへくち残る世に

關

遠くとも頼む心はかよふらむ關のかための動きなきよに

旅

終にすむやどりならねば野も山もいづく旅ねの心地こそせね
かりそめの草ひき結ぶ旅ねにもわすれぬものを妹が手枕

海路

わたつみのさすが舟路もしらぬ哉花のみやこのあるじのみして

山家

都にてのどかに思ふ山里も心すまねばことしげきかな
山里のましばの煙はるも秋も霧とかすみに晴間なきかな

田家

秋はてし山田のなるこ庵あれてひく人なしにいかが世にふる

述懐

かしこきも身の上しらすよそにてぞ愚かなる人に誠とふべき
數しらす思へば何もおもふこと思はねばまた思ふことなし

夢

思寐のおもふままなる夢の中にさめてまさらぬ現なりけり

神祇

わきてわがたのめに深くいすす河仰げば高きをとこ山かな

釋教

何とかは事ありがほにいひなして心の外の道もとむらむ
祝

龜の尾の山は萬代こゑたてて河はちとせに一たびぞすむ
祈りおくことは違はず神もきけ我がすべらぎの千代の行末

龜山院御集拾遺

題しらす新拾遺集

春立つと日影も空にしられけり霞みそめたるみ吉野の山

位におましましける時うへのをのことも鶯の

歌つかうまつりける次に詠ませ給うける續千載集

谷ふかき古巢をいづる鶯のこゑきく時ぞ春はきにける

位におましましける時うへのをのことも雪中

梅といへる心を仕うまつりけるついでに續拾遺集

折りてこそ花もわかるれ梅が枝におなじ色そふ春の沫雪

月華門院に梅花奉らせ給ふとて今續古集

君さそふしるべにぞやる鶯もきゐる軒端の梅のにはひを

龜山院御集拾遺

四五一

題しらす新後集

折らばまた匂や散らむ梅の花たちよりてこそ袖にうつさめ

庭梅といふことを玉葉集

あかなくの匂をちらす梅が枝の花にいとほぬ庭の春風

嘉元元年十二月の御歌に夕梅抄夫木

そことしる匂なからば梅の花夕やみみちはよそにすぎまし

春の御歌の中に今續古集

百千鳥けさこそ來鳴けささ竹の大宮人に初音またれて

花の盛に雨ふり侍りける日西園寺に御幸あり

て花御覽せられける時よませ給うける玉葉集

春雨のふる木のさくらけふしこそをりえて花の色も見えけれ

花の御歌の中に同

山の端に入日うつろふくれなるのうす花ざくら色ぞことなる

位におましまししける時後一條入道前關白左大

臣所所の花を見て一枝折りて奉るとて「君がた

め知らぬ山路をたづねつつ老のかざしの花を

見るかな」と奏しける御返し續千載集

たづねける知らぬ山路の櫻花けふ九重のかざしとぞ見る

位におましまししける時題を探りて詩歌をあは

せられけるついでに禁庭花といふ事をよませ

給うける續後拾遺集

わが宿の雲居の櫻いくたびかおなじ千歳の春をちぎらむ

關路花抄夫木

立ちとまる霞の關のあけぼのに花もいくへかにはひそふらむ

弘長三年二月龜山の仙洞に行幸ありて花契還

年といふことを講せられし時續古集

尋ねきてあかぬ心にまかせなば千年や花のかけに過ぐさむ

庭落花といへるこころを詠ませ給うける遺集拾

今はとて散るこそ花のさかりなれ梢も庭もおなじにほひに

題しらす玉葉集

いくほどかながらへてみむ山櫻花よりもろき命とおもへば

正應五年白河殿の五十首歌合夫木抄

ここに見る春の小山田うちかへしおもへば花も昔こふらし

鶺鴒玉葉集

大井河鶺鴒舟のかがりほのみえて下すや浪のよるぞしらるる

秋の御歌の中に今續古集

秋来てはかくこそありけれ吹く風の音さへつらき庭の萩原

いくとせの秋の一夜をかさぬらむ思へば久し星合のそら

萩をよませ給うける遺集拾

宮城野の木の白露も色みえてうつりぞまさる秋萩の花

題しらす新後撰集

秋はただもの思へとや萩の葉の風も身にしむゆふべなるらむ

文永七年八月十五夜五首の歌めされしついで

に野月をよませ給うける同

見るままに心ぞうつる秋萩の花野のつゆにやどる月影

八月十五夜月の御歌の中に玉葉集

いくほどと思へば悲し老の身の袖になれぬる秋のよの月

弘安三年九月十三夜人人に十首の歌めされし

ついでに月前祝新後撰集

諸共におなじ雲居にすむ月のなれて千年の秋ぞ久しき

題しらす新後撰集

花すすき袖に涙の露そへてくるる夜毎にたれまねくらむ

龜山院御集拾遺

題しらす新千載集

葛城や久米路の橋は月もなほ中空にこそすみわたりけれ

暮天聞雁といへるころを遺集拾

遠ざかる聲ばかりして夕暮の雲のいづくに雁の鳴くらむ

弘安七年九月九日三首の歌講せられける時菊

花宴久といふことを新千載集

千年までかはらぬ秋はめぐりきてうつろはぬ世の菊の盃

御惱おもらせ給へるころ太政大臣實兼菊の花

をかざりて九月九日奉りけるに山行幸記

この花もあすより後は白菊のとしどしにみし千代のかざしぞ

題しらす新後撰集

ほどもなくうつろふ草の露のまに今年の秋もまたや暮れなむ

紅葉をよませ給うける遺集拾

もみぢ葉を今ひとしほとことづてむしぐるる雲の末の山風

人人題を探りて歌つかうまつりしついでに落

葉浮水といへる心を同

大井河のせきに秋の色とめてくれなるくくる瀬瀬の岩波

庭落葉抄夫木

九重につもる紅葉のいろぞこき玉しく庭も光そふまで

人人題をさぐりて歌仕うまつりしついでに月

前眺望といへる心をよませ給うける遺集拾

嵐山そらなる月はかげさえて河瀬の霧ぞうきてながる

冬の御歌の中に抄夫木

昨日今日みやこの空も風さえて外山の雲に雪はふりつつ

位におはしましける時深雪といふことをよま

せ給ひける新後撰集

限あれば深きみやまもいかならむけふ九重につもる白雪

曙雪をよませ給うける新後拾遺集

ほのぼのと明けゆく山のたかねより横雲かけて降れる白雪

暮山雪といふ事を今集古

まがきには山かと思ゆる夕暮はをのへにつづく庭の白雪

永仁五年五節のまゐりの日申させ給ひける風雅集

面かげも見る心地するむかしかなけふ少女子が袖のしら雪

雪の深く積りて侍りけるに性助法親王のもと

に遣はされける観集千載

昔より今もかはらず頼みつる心のあとぞ雪に見ゆべき

見 戀今集古

契をばあさかの沼と思へばやかつみながらに袖のぬるらむ

うへのをのことも寄垣戀といふ事をつかうま

つりけるついでに同

葦垣のま近きかひもなかりけり心かよはぬ中のへだては

五首の歌講せられける時寄夢戀同

思ひつつぬる夜も人のつらきかな夢も現の見ゆるなりけり

戀の御歌の中に同

ながらへむ人の心はいさや河いさわればかり戀ひわたるとも

寄杜戀といへる心をよませ給うける遺集拾遺

よしさらば言の葉をだに散らさばやさのみ岩手の杜の下風

弘長三年九月十三夜十首の歌めされしついで

に月前別戀といへる心を同

きぬぎぬの名残を月にかこちてもうしとぞ思ふ有明の空

文永五年八月十五夜の歌合に月驚絶戀同

何とまた思ひたえても過ぐる身の月みるからに袖のぬるらむ

位におはしましける時うへのをのことも寄海

戀といふ事を仕うまつりけるついでに續後拾遺集

思ひあまり袖にも波はこえにけりありしにかはる末の松山

題しらす新集後撰

くれなるの涙の色もまがふやと秋は時雨に袖やかさまし

忍戀のころを續千載集

知らせばや岩もる水のたよりにも絶えず心の下にせくとは

題しらす同

さりともと猶たのまるる夕暮をちぎりしままにとふ人もがな

逢不新集後撰會戀拾遺集

つらきかな待ちしにかはる夕暮を身はうき時と秋風ぞふく

齋宮に聞えさせ給ひける續増

夢とだにさだかにもなき假伏の草のまくらに露ぞこぼるる

山家のころを新集後撰

さびしさも誰れにかたらむ山陰の夕日すくなき庭の松かせ

布引の瀧御覽じにおはしましたりけるに御伴

に侍ふ人人歌つかうまつりけるついでに續後拾遺集

白絲の世をへて後のためしかな今日わが見つる布引の瀧

弘安元年九月詩歌合に仙家勝趣妙木

春秋をここにとどめて年をふるわがすむ宿やこの名なるべき

旅のころを新集後撰

岩根ふみかさなる山の遠ければ分けつる雲の跡もしられず

文永七年冬の頃天台座主道玄内裏にて寒の御

祈の爲に如法佛眼の法修しける時雪降りけれ

ば承元の昔の跡を思ひて九重に降りしく雪は

古の法の筵に跡や見ゆらむ」と奏しける御返し同

いにしへの跡をしらせて降る雪のたのむ心は深くなりぬる

祝の心をよませ給ひける新集後

三笠山いのる心のくもらねば月日とともに千世やめぐらむ

建治二年八月龜山殿にてはじめて松色浮池と

いへる題を講せられ侍りしついでに遺集拾

よろづよと龜の尾山の松かげをうつしてすめる宿の池水

後嵯峨院の御事ののち龜山殿にてよませ給ひ

ける新集後

大堰河ゆくせの浪もおなじくば昔にかへれ君がかげ見む

官つかさどめしの頃爲世が參議を望み申すとて前大納

言爲氏和歌の浦に獨老いぬる夜の鶴の子の爲

思ふねこそなかるれとよみて奏しける御返し同

和歌の浦に子を思ふとて鳴く鶴のこゑは雲居に今ぞ聞ゆる

准後の九十の賀に賜はせける新集後

ももいろと今や鳴くらむ鶯もこのかへりの君が春へて

雪の降りける朝賀茂の社に御幸ましましける

に前大納言爲世いまだ中將にて御供に侍りけ

るが許へ從三位氏久榊の枝につけて年を経て

かはらぬ色の榊葉につもるみゆきは神ぞうく

らむとよみて贈りけるよしきこしめして新集千載

今朝もまた祈る心のとみえて頼みをかくる雪のしらゆふ

石清水の社に御幸ありし時よませ給ひける遺集拾

いはしみづたえぬ流は身にうけつわが世の末を神にまかせむ

神祇のこころを詠ませ給ひける同

今もなほ久しく守れちはやぶる神のみづ垣よよを重ねて

弘安八年十月住の江に御幸ありて行旅述懐と

住吉の松はためしも知るらめや二代のあとにかへる浦波

御乳母の一めぐりの佛事行はせ給ふ日雪いた

う降りければ九條三位檜扇のつまを折りて跡

とめてとはるる御代の光をや雪の中にも思ひ

いづらむと^しかきて女房に見せけるを御覽じて^{御覽}

なき人のかさねし罪もきえねとて雪のうちにも跡をとふかな

後二條院龜山殿に行幸ありて曉かへらせ給ひ

ぬるに聞えさせ給ひける^同

したはるる名残にたへす月を見れば雲の上にご影はなりぬる

なき御跡の事ども思しめすままに仰せおかれ

ける御ついでに<sup>日吉社並歌
山行幸記</sup>

人は皆あらましにだに慰むに思出おほきわがむかしかな

後宇多天皇御製

立春天 <sup>七首
山殿</sup>

ひさかたの天の香具山かすめるぞ春たつけふの空にはありける

初の春のこころを詠ませ給うける<sup>續千
載集</sup>

やま川の氷もとけて春かせに年たちかへる水のしらなみ

<sup>關路早春といへる心をよませ給うける
遺集後拾</sup>

逢坂の木綿^{ふわた}つけ鳥のなくなべに明くるも待たで春はきにけり

雪中若菜といふことをよませ給うける<sup>續千
載集</sup>

袖の上にかつふる雪をはらひつつ積らぬ先に若菜つむなり

春の歌とてよませ給うける<sup>藤葉
集</sup>

山高み花よりさきの春の色をのどかにみせてたつ霞かな

後宇多天皇御製

龜山殿千首の歌に霞をよませ給うける

續集

櫻花さかばと思ふ山のはにあやにくにたつ朝がすみかな

河霞といふことをよませ給うける

新集

音はしていざよふ浪もかすみけり八十うち川のはるの曙

若草

龜山殿
七百首

いつのまにやくとも見えぬ春日野のけふもえわたる春の若草

梅を

風雅

きさらぎやなほ風さむき袖の上に雪ませにちる梅のはつ花

梅をよませ給ひける

玉葉

白妙の色はまがひぬ沫雪のかかれる枝の梅のはつはな

龜山殿にて題をさぐりて七百首の歌人人によ

ませられ侍りしついでに簷梅

續集

わが宿の梅さきぬとはいはずとも人にはつげよ軒の春風

徳治二年三月歌合に

新集

難波津のむかしの風はことなれど我が世春べと咲くや梅が枝

龜山殿千首の歌に梅をよませ給うける

續集

梅が香のかすめるよはは木の本もしらでぞ匂ふ春の山かせ

山家梅

龜山殿
七百首

梅が香の匂ふ春べは山ざともものうからすぞうぐひすの鳴く

梅移水

同

春風のかをとめくれば谷陰にかがみくもらぬ梅のした水

百首のうためされしついでに

續集

家居してききぞなれぬる梅の花さける岡邊のうぐひすの聲

里鶯

龜山殿
七百首

春きぬと今やきくらむ里人もはつねにつぐる鶯のこゑ

竹鶯

同

鶯のちよの初音はささ竹の大みやびとに春やつぐらむ

野春雨 七曲 百首

いまいくか飛火の野守たちいでむ若菜をいそぐ春雨のそら

庭春雨 同

こころすむ老の涙にあらそふは草のいほりの軒のはるさめ

海歸雁 同

春ごとにとまらぬものか蟻のすむ里のしるべに歸るかりがね

遠歸雁 同

行末は雲路にとちてみえずとも霞までかへれはるの雁がね

野遊 同

白妙の袖は霞にうづもれて春日をくらすのべのもろ人

遊絲 同

春の野の駒にぞまがふ見わたせば霞のひまに遊ぶ絲ゆふ

尋花といへる心をよませ給うける 續集

尋ねゆく道しらすとも遠近のたづきは花の色にまかせむ

龜山殿千首の歌に花を 同

春といへど待つこともなき世の中に花に心の猶とまるかな

待花といへるこころを詠ませ給うける 續集千

老が身のなほながらへて今年またふたたび春の花や見るべき

花を 續集

やまざくらさかりになれば枝かはす松の常磐もみえぬ春かな
山ざくら一木なりとも宿しめてしづかに花はちるまでもみむ

題しらす 新集後

春くれば雪とも見えず大空の霞をわけて花ぞちりける
吉野山をのへの櫻さきぬれば絶えずたなびく花の白雲

花をよませ給うける 玉葉

なべて世の春の心はのどけきにうつろひやすく花のちるらむ

故郷花を較新千

故郷にむかし忘れず咲く花はたが世の春を思ひいづらむ

題しらす較新千

あらし山これも吉野やうつすらむ櫻にかかる瀧のしら糸

花同慶門院御屏風押色紙和歌

いにしへの春をぞ思ふ今の世の花になりぬる人のこころに

見花龜山殿七百首

春ごとに咲きまさり行く山櫻われを老木と花やみるらむ

關花同

逢坂やゆふつけ鳥もなきわたり梢にあくる花のしらくも

里花同

住吉の遠里小野のはなざくら松にさそひて春かせぞ吹く

千首の歌よませ給うけるに續後拾遺集

白雲の五百重かさねて見えつるは四方の山邊の櫻なりけり
散らばまた雪と消えなで櫻花いくたび風のつらさ添ふらむ

正安三年二月二十七日日吉の社に御幸ありて
次の日志賀の山の櫻につけて内へ奉らせ給う

ける新拾遺集

君ゆゑと今日こそ見つれ志賀の山かひある春に匂ふ櫻を

御前に遅櫻をうゑさせ給ひて法印道我に歌つ

かうまつるべきよし仰せられ侍りしかば「春風

もこの一本を山櫻君がためとやよきて吹きけ

む」とよみて奉りける御返し續現集

春風にもろき老木の山ざくらこのひともとをいかでよきけむ

落花の心をよませ給うける同

うしとみて散るともよそに過ぐべきを花のあたりは立ちぞ離れぬ

春月を集玉

眺むればそこはかたなく霞む夜の月こそ春のけしきなりけれ

龜山殿の七百首の歌に苗代遺集後拾

せきかくる苗代水のさまさまにわくるや人のこころなるらむ

籬山吹續集千

さくら花ちりにし後は山ぶきのさける籬にのこる春かな

夕歎冬龜山殿七百首

咲きつづく岸の山吹かげみえてながれはゆかぬ花の夕なみ

藤埋松といへる心をよませ給ひける續集千

松が枝はみどりすくなく埋れてむらさきかかる池の藤浪

春欲暮龜山殿七百首

老が身を嶺の入日にたとへてもたのまぬ春の暮れむとすらむ

暮春月同

有明のわかればやよひ今いくかくれなばなげの月のかげかは

閏三月盡同

一とせにやよひかさなる時にこそふたたび春のもの思ふなれ

卯花を續集現

里つづき垣ねにうゑむこの頃は卯の花月夜みちもまよはじ

待郭公龜山殿七百首

時鳥いまはまたじと待ちかねてねなむ今宵やなきて過ぐらむ

始聞郭公同

時鳥われは初音ときくものをまた誰が里に鳴きてきつらむ

原時鳥同

夏きてもけふみかの原いづみ川いつしかもなく時鳥かな

龜山殿七百首の歌に獨聞郭公續集現

後宇多天皇御製

人しれず我がためとてや時鳥ひとりねざめの枕とふらむ

龜山殿七百首の歌講せられけるついでに集麻葉

橋のにははざりせば時鳥むかしながらの宿もしられじ

百首の歌めされしついでに新集千

鳴きすぐるならしの岡の時鳥ふる里人にことやつてまし

夏草の花の枝ごとに置く露を五月の玉にぬきぞとどめむ

田家早苗七龜山殿

山里の門田のおもに水こえてすすしく今日は早苗とるなり

曉廬橋同

曉の枕ににはふたちばなは老のねざめのをりを知りけり

山五月雨同

日數へてかさなる雲のひまもなしくらぶの山の五月雨の頃

五月雨の心を新集現

五月雨にあなしの河原水こえてひはらも見えず曇るころかな

雲間夏月七龜山殿

たちまよふ雲まにとめよ夏の月いるべきかたの嶺をへだてて

水邊夏月同

手にむすぶ水には秋のかよふとて月は涼しく宿るなりけり

夏月易明同

まだ宵と思ふものから夏のよのしらむか月のあけやすき空

元亨三年八月十五夜五十首の歌めされけるつ

いでに夏月新集千

いづみ河とほきわたりの月かげに聲をつくしてなく時鳥

夏の歌の中に新集千

道ありて亂れずもがな夏草のことしげき世にまたも交らば

庭夏草七龜山殿

小田わけむ人もたのまぬみやまべの宿にはしげれ庭の夏草

夏の御歌の中に玉葉集

夕づく日よそに暮れぬる木の間よりさしくる月の影ぞ涼しき

元亨三年七月龜山殿にて人人題を探りて七百

首の歌つかうまつりけるついでに遠鏡後拾

駒とめてしばしすすまむうちわたす檜の隈河の水の白浪

嘉元の百首の歌めされけるついでに新集千載

夜ひかる玉とぞみゆる水くらきあしへの浪にまじる螢は

橋龜山殿
七百首

夏の夜はとぶや螢の玉ちりてをだえの橋にみだれゆくらむ

江螢同

蘆火たく煙はみえず難波がた入江のなみをやくほたるかな

夕立雲同

なる神も雲のいづこになりぬらむよそに過ぎゆく夕立の空

題しらす後集現

夕立はいく里とほくなりぬらむ残る雲間にみゆる稻づま

元亨元年九月龜山殿にて人人題を探りて五十

首の歌仕うまつりけるついでに納涼の心をよ

ませ給ひける新集古
今集

静かなる心しすめば山陰にわが身涼しき夏のゆふぐれ

龜山殿にて人人題をさぐりて七百首の歌つか

うまつりしついでに立秋朝後集現

今朝のまに袂すすしき夏衣ひと夜にたちぬ秋のはつかせ

元亨元年九月二十六日龜山殿にてうへのをの

こども題を探りて歌仕うまつりけるついでに

七夕新集千載

後宇多天皇御製

七夕はわれてまたあふかがみかと秋の七日の月やみつらむ

七夕船 七曲山殿
七曲山殿

七夕のこよひとたのむ影なれやゆふべの月のつま迎ひぶね

七夕朝 同

七夕のいははた衣かさねても今朝きぬぎぬの袖ぞ露けき

題しらす 新撰後
撰集

おきもあへず亂れにけりな白露の玉まく葛に秋風ぞふく

徑 露 七曲山殿
七曲山殿

諸人も道の露をやわけつらむ鹿なく秋の君がなさけに

百首の歌めされしついでに 續千
載集

たかまどの野べの秋風ふくたびにたもとにうつす萩が花すり

原 薄 七曲山殿
七曲山殿

わけいればあしたの原の花薄ほにいづる秋ぞ深くなりゆく

浦 霧 同

見ずもあらずみもせぬ霧のたえ間よりゆくへ定めぬ浦の舟人

秋夕 風押門院御歌
風押門院御歌

あはれさは何れなるらむ身にしむも夕を秋とわけてながめむ

元亨三年八月大覺寺殿に行幸ありて人人題を

探りて歌仕うまつりけるついでに鵜河をよま

せ給うける 新撰
遺集

鵜飼舟うきてかがりの見えゆくや立つ河霧の絶間なるらむ

龜山殿千首の歌に女郎花 續現
集

見ぬ人にかたりやせまし女郎花露のみおつる野べの秋かせ

同じ千首の歌に初雁 同

白雲のみちゆきぶりのことづては初雁がねにかくる玉づさ

うへのをのことも題をさぐりて歌つかうまつ

野べにとるわが松蟲の鳴く聲もなれしすみかを戀しくや思ふ

月の御歌の中に同

あくがるる心は空にさそはれてぬる夜すくなき秋のよの月

百首の歌めされしついでに續千載集

老が世に秋の心もはれにけり六十ち近づく山のはの月

山鹿といへる心をよませ給うける同

深くなる秋の哀をねにたてて峯の男鹿もなきまさるなり

月を續現葉集

秋ふかきみ山がくれの影みえてむかし忘れぬ雲の上の月

關月龜山殿七百首

昔よりすまの關守せきとめて秋は月夜のながきなりけり

浦月同

明石がた猶たづね見む秋のよのこと浦にすむ月もかくやと

磯月同

浦風にあらいそ波のくだけつつ玉ちる月のかげぞ定めぬ

山家月同

秋をへて月もいくよか澄みにけむわれもふりぬる山の奥かな

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌講せられ

けるついでに秋月といへる事をよませ給うけ

る新千載集

嶺の月雲も遠くなりけり浮世いとひしながめせしまに

龜山殿にて人人題を探りて千首の歌つかうま

つりけるついでに月を新後拾遺集

空にすむものならなくに我が心月見るたびにあくがれてゆく

千首の歌よませ給うけるに續後拾遺集

後宇多天皇御製

秋ふかき野風を寒みさを鹿のふすや草むら露ぞこぼるる

遠擣衣龜山殿
七百首

里人はうちもたゆまぬさ衣のたえまは風ぞさそはざりける

龜山殿にて五首の歌講せられけるついでに河

曉月をよませ給うける集藤葉

大堰河やまかげくらき岩間よりすゑに流るるありあけの月

今上「仙人の千年の秋をゆづりおきて君が爲に

と咲ける白菊」とよみて菊の枝につけて奉らせ

給ひける御返し新集千
載集千

行末はなほ長月の菊の枝にかさなる千世を君にゆづらむ

弘安七年九月九日龜山院に籬菊露芳といふ事

を講せられけるに位におましましけるととき奉

らせ給ひける新集千
載集千

千代ふべき菊の籬に色そへて花ゆるかをる秋のしらつゆ

菊 露龜山殿
七百首

ちぎりおく露も千とせにつもりてや老せぬ菊の淵となるらむ

位におましましける時弘安七年九月九日仙洞

にて三首の歌講せられける時菊花宴久といへ

るこころを詠みて奉らせ給うける新集千
載集千

みづがきの久しき世より跡とめて今日かざすてふ白菊の花

尋紅葉龜山殿
七百首

はるかなる嶺のみみぢのかくれねば尋ぬる道も迷はざりけり

岡紅葉といふことを集風雅

いろいろにならびの岡の初紅葉秋のさが野のゆききにぞ見る

永仁五年龜山殿の歌合に落葉新集千
載集千

橋姫のおるや錦と見ゆるかな紅葉いざよふ宇治の川なみ

後宇多天皇御製

龜山殿の千首の歌に新千載集

春秋のにしきなればや嵐山おなじ櫻のまたも見つらむ

長月やといふことを初の句に置きて暮秋の二

十首の歌よませ給うける同

長月や雲居の秋のこととはむむかしにめぐる菊のさかづき

九月盡曉龜山殿七首

をしめども今つきぬなり曉のかねをかぎりの秋のわかれち

時雨知冬といへる心をよませ給うける續千載集

しぐれゆく空にもしるし神無月くもりもあへず冬やきぬらむ

元亨元年十月八日三首の歌合に時雨新千載集

紅のちしほの木の子葉そめすてて雲のいづくにしぐれゆくらむ

元亨元年九月二十六日龜山殿にてうへのをの

ことも題をさぐりて歌つかうまつりける同

でに時雨雲といふことをよませ給ひける同

かきくらししぐるる雲はすぎぬなりこれも定めぬ世の習かな

杜時雨龜山殿七首

染めわたすしのだの森の夕時雨千枝もちしほの色ぞまさらむ

庭霜同

庭の面に有明の月の白妙にのこるとみえておける霜かな

冬の歌とてよませ給ひける新千載集

冬きてはあしたの原におく霜のさむく日毎になりまさりつつ

龜山殿にて山家冬朝といふことをよませ給う

ける同

われ住めば人目もかれず山里になほ聞きすてぬ朝まつりごと

殘菊霜といふことをよませ給うける續千載集

秋すぎてうつろふ色を見せじとや今さら霜のおける白菊

人人に歌を召して合せられけるついでに庭殘菊といふことを詠ませ給ひける風雅集

庭の面に老の友なる白菊はむそぢの霜やなほかさぬむそぢべき

元亨三年八月大覺寺殿に行幸ありて人人題を

探りて歌つかうまつりしついでに落葉をよま

せ給うける後拾遺集

山里は散るもみち葉に道たえて冬は人目のかるるなりけり

千首の歌よませ給うける同

水鳥の青葉の山は名のみして露霜おけばいろづきにけり

河落葉玉葉集

立田河ながるる水も此のごろは散る紅葉ゆゑをしくぞありける

岡寒草龜山殿七百首

水莖の岡の萩原あきすぎでかれ葉にのこる冬のゆふかせ

池寒蘆同

水鳥の青羽は冬もかれねどもあしまさえゆく池の面かな

江寒蘆同

鳴きわたる入江のたづの聲さえて蘆まぞ冬のかげは見えける

掛樋氷同

きくままにかけひの音もたえぬなり夜のまに氷る谷川の水

杣冬月同

光そふ月のかつらは枯れもせでわがたつ杣ぞ猶さかゆべき

冬冴月同

月影もふけゆくままに霜ぞおくさゆるは冬のならひなれども

題しらす續千載集

あらし山ふもとの鐘は聲さえて有明の月ぞみねにのこれる

寒夜千鳥龜山殿七百首

夜を寒みさほの山かせさえまさり河瀬のなみに千鳥なくなり

竹 霰 七編山殿
百首

冴ゆる夜のねざめの床におとづれて竹の葉そよぎふる霰かな

篠 霰 同

道のべのしのの小篠にふるあられ一むらすぎて玉ぞみだるる

屋上霰 同

板びさし竹の柱のかりの世にうちおどろけとふる霰かな

初 雪 同

冬もきぬさびしさまさる苔の庭はだれにふれる今朝の初雪

田家雪 同

雪ふれば門田の稻もかりにしをまたくもをなす有明の空

閑居雪 同

山里の雪のうちこそしづかなれとふべき人もあらじと思へば

松 雪 同

消えなくにまた降りつもる松の雪かかれる枝ぞさらに折れふす

竹 雪 同

あとたえてまがきの山もうづもれぬ音さへさびし竹の雪をれ

杉 雪 同

三輪の山杉のしるしもなかりけり緑をうづむ雪のしらゆふ

寄嵐雪といへる心をよませ給うける 續集
現

吹きすぐるあらしの末はみどりにてまづあらはるる峯の白雪

雪 を玉
集

白妙のいろより外の色もなし遠き野山の雪のあさあけ

雪満衣といへる心を 續集
千

けぬが上に積らばつもれ降る雪のみのしろ衣うちもはらはじ

路歳暮 七編山殿
百首

後宇多天皇御製

世の中よいそぐは年のならひにて行くともしらぬ老らくの道

文保元年正月雪ふり侍りける日御方違に西園

寺へ御幸侍りて次の年の正月おなじく行幸侍

りけるに又雪の降りければ去年をおぼしめし

出でさせ給ひて入道前太政大臣のもとにつか

はされける續千載集

今日しこそ思ひもいづれ雪の中に祝ひそめてし千代の初春

忍戀のころをよませ給うける新後撰集

此の頃は野べの男鹿の音にたててなかな計といかでしらせむ

不逢戀同

こむ世には契ありやと戀ひ死なむ逢ふを限の命をしまで

初尋縁戀といへるころを續千載集

思ひそむる心の色を紫のくさのゆかりにたづねつるかな

寄池戀同

池水の底の玉藻のみがくれてなびく心をたれによすらむ

百首の歌めされしついで同

山鳥のはつをの鏡ひとめ見し面影さらずひとのこひしき

葦垣のまぢかけれども徒に三とせあひみぬ契なりけり

祈經年戀といふことを詠ませ給うける同

貴船川うきとしなみのかかれとは祈らぬものを袖のしら玉

題しらす同

きぬぎぬの袖の涙をかたみにて面影とむるありあけの月

題をさぐりて詩歌を合せられ侍りしとき別戀

の心をよませ給うける同

見るままにこれやかざりと悲しきは別るる袖のありあけの月

百首の歌めされしついで同

恨みてもかひこそなけれ 蜚少女いさりたく火のもえ焦れつつ
はかなしな戀も恨も空蟬の空しき世には音のみなかれて

千首の歌よませ給うけるに道後拾

此の世にてうき名流さじかぎろひの岩かき淵に身は沈むとも

十首の歌めしけるついでに寄河戀をよませ給

うける同

初瀬河ゐでこす波の流れても絶えせぬ中とちぎりおかなむ

文保の百首の歌めしけるついでに同

あふと見る夢も現もいかにして木綿つけ鳥の音に別るらむ

寄葛戀といふことを同

山がつの垣ほがくれの葛かづら恨ありやと問ふ人もなし

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌めされけ

るついでに戀月新千載集

またいつとたのめぬ月の有明に身のうき雲ぞ嶺にわかるる

戀の御歌の中に新集拾遺

わするなと今一たびは云ひてましありし別をかぎりと思はば

龜山殿七百首の歌の中に寄桐戀といふことを

よませ給うける集葉

契りしもたがはざらまし桐の葉をきざみし人も有る世なりせばのイ

不見戀龜山殿七百首

吹く風の音にはきけどいたづらに目にみぬ中に年ぞへにける

見戀同

しられじな思ふ心はわたのそこみるめにやがてぬるる袖とは

待戀同

夕暮をなになげきけむ待つ夜はのふけゆく空は猶ぞ悲しき

厭戀同

忘らるる身をうき雲のありはててなきたる空にながめわびつつ

朝戀七龜山首殿

袖におく露をば秋と思ひしにあくるあしたの涙なりけり

寄風戀同

色かはる人の心におく露の身をあき風にちるなみだかな

寄關戀同

忍びつつゆるさぬ中のへだてにて人をなこそその關守ぞうき

寄埋木戀同

人しれぬ谷のうもれ木年ふりて心ひくともいかでしらせむ

寄鴉戀同

我が中のにほの通路それならば池のこころも下にたのまむ

寄鴛戀同

つらからじうらやましくもをし鳥の羽根をかはせる契なりせば

千首の歌よませ給ひけるに蟬螢續後拾遺集

沖つかせみるめを波にあまの袖しほたるとだに知らせてしがな

山家續千載集

尋ねきて見るもはかなきすまひかな岩根に結ぶ草のいほりは

山月といふ事をよませ給うける同

心すむはこやの山の秋の月ふたたび世をも照らしつるかな

山中瀧水といふ事を同

わけいれれば深きみ山の高嶺より落ちくる瀧の音のさやけさ

名所山七龜山首殿

春ごとに匂ふさくらに葦垣のよし野の山をちかく見るかな

名所橋同

老らくの昔ながらの身はふりて世にわたらぬは静かなりけり

名所池同

くみて知る水のころや深からむ近くなれたる大澤のいけ

閑庭松といふ事をよませ給ひける新集後

かくしこそ千年も待ため松が枝のあらし静かにすめる山里

旅のころを詠ませ給うける新集千

いづくをか家路とわきて頼むべきなべてこの世を旅と思へば

羈中夜龜山殿
七百首

みじかさも旅ねはわかす夏びきの手引の絲のよるぞかなしき

羈中嶺同

ゆくすゑもいくへ越えなむ岩根ふみかさなるみねのあとの白雲

元亨三年龜山殿にて人人題を探りて七百首の

歌つかうまつりけるついでに羈中鐘といふこ

とを詠ませ給うける新集古

今日もまたかさなる山を越えくれて雲のそこなる入相のかね

山家獸龜山殿
七百首

年ふればふすゐの床もへだたらでなれぬる山のおくの庵かな

夢驚同

むなしくて一夜の夢はおどろくにながき迷ぞさむるかたなき

百首の歌めされしついでに新集千

過ぎにける山は百重をへだつれど一夜にかよふわが夢路かな

おなじついでに哀傷の心を同

人の世のならひを知れとあきつ野に朝ある雲のさだめなきかな

懷舊淚龜山殿
七百首

古いぬればもろき涙のくせとてや昔をきけばそでぬらすらむ

獨懷舊同

わきてその戀しきことはなけれども昔わすれぬひとりねの床

寄月述懷同

後宇多天皇御製

ながめつつ老とやつもる秋毎にわが身ひとつの月ならねども

千首の歌よませたまひけるに鏡像を新集千載

ます鏡うつれる影をそのままにありと見るこそなみだなりけれ

おなじをり同

水の面にうつれる月のひかりこそ見るには見えて取れば取られね

元亨三年八月十五夜月の五十首の歌めされけ

るついで同

尋ぬべきかたこそなけれ胸の中の月のみやこにいつも住む身は

題しらす遺集拾

むかしとて戀しきことはなけれども老の寢覺におもひいでつつ

千首の歌よませ給ひける御時同

つぎの木のいやつぎつぎの末までも世に仰がるる影とならなむ

こころにてやがて心をつたふるぞ三世にかはらぬ誠なりける

こころをば都にとめて天ぎかるひなのあら野は行く空もなし
見し人のさらぬ別におくれゐて残るよはひはいつを待つらむ

百首の歌めされしついで新集千載

あつめおく言葉の林ちりもせで千年かはらじ和歌のうらまつ
春秋のかけをならべて見つるかなわがすべらぎのおなじ光に
ちぎりおかわわが萬代の友なれや竹田のはらの鶴のもろごゑ

寄國祝といへる心をよませ給うける同

かたぶかぬ速日の嶺にあまくだるあめのみまごの國ぞわがくに

寄鶴祝言といふ事を新集後撰

葦たづの雲居にかよふ聲のうちにかねてもしるし千代の行末

准後の九十の賀に賜はせける御贈

ゆくすゑをなほ長き世と契るかなやよひにうつる今日の春日に

東二條院七そちにみたせ給ひける時よみたま

ひける新撰集後

百年に君がななそちあひにあひてともに八千代の春や待つらむ

除目のあした尙侍藤原現子朝臣に給はせける同

そのかみに頼めしことの違はねばなべて昔の世にやかへらむ

位さらせ給ひてのち世の中しろしめされける

に持明院殿にひきかへ大覺寺殿には馬車のた

ちこみたるを御覽じて細増

わが住めばさびしくもなし山里もあさまつりごと怠らずして

神集風雅 祇

天つ神國つ社をいはひてぞわが草原のくにはをさまる

神祇のころを業續現

住吉の松のうれこす風の音はこれもややがてやまと言の葉

龜山殿の七百首の歌に平野神を新撰集千

今もなほ民のかまどの煙までまもりやすらむわが國のため

百首の歌めされしついでに較續集千

わが國に内外の宮もあらはれて傳へしのをいままもるらむ

世をおもふわがすゑまもれ石清水きよき心のながれひさしく

題しらす同

稻荷山のるしのかひもあらば杉の葉かざしいつかあひみむ

百首の歌めされしついでに神祇新撰集後

名もしるし色をもかへぬ松の尾の神のちかひは末の世のため

題しらす同

千早振かみもひかりをやはらげてくもらす照せ秋の夜の月

月の五十首の御歌の中に雜月を集風雅

常闇をてらすみかげの變らぬはいまもかしこき月讀の神

釋教の御歌の中に同

そのままに絶間を知るは誠ある三國つたはることばなりけり

おなじ御歌の中に新拾遺集

梅の花みよのほとけのためにとて折りつる袖ぞ人などがめそ

釋教の心をよませ給ひける風雅集

こころざし深く汲みてし廣澤のながれは末もたえじとぞ思ふ

同じころを新後撰集

鷺の嶺やとせの秋の月きよみその光こそこころにはすめ
まどかなる八月のつきの大空に光となれる四方のあき霧

前左大臣母の十三年の佛事し侍りけるに彼の

文の裏に壽量品を書かせ給ひて包紙に書きつ

けさせ給ひける風雅集

はかなくて消えにし秋の涙をも玉とぞみがくはちす葉のつゆ

龜山殿にて人人題をさぐりて七百首の歌つか

うまつりけるついでに寄露無常といふことを

よませ給うける續集

あだし野の露はちりてもまたぞおく消えてあひ見ぬ人ぞはかなき

菩提心論日日漸加至十五日圓滿無碍のころ

を詠み給ひける續集

日にそへて影はかはれど大空の月はひとつぞ澄みまさりける

三摩地現前同

月のためなにをいとはむ雲霧もさはらぬ影はいつもさやけし

十住心論の開内庫授寶同

さとりいる十の心のひらけてぞおもひのままに世を救ひける

真言院の花を御覽じて同

三つの世につねに住むべきことわりは散らぬ櫻の色ぞ見せける

百首の歌めされしついでに同

尋ねいる交野の風をうけてこそ法をつたへしやどはしめけれ
久方の空に月日のめぐるこそまよひを照らすはじめなりけれ

不瞋志戒 七首 山首殿

消えねただ富士の煙のそらにのみ胸のおもひはあともなきまで

顯密の教法の心をよませ給ひける長歌 千載集

くもりなきころは空に
うきぐもを風のたよりに
くらきよりくらき道にも
ためとてぞ三世の佛は
さまざまにななの宗まで
たねとしてまことの道にぞ
これはみなしかの園生の
わしの嶺八年のあきをを
てらせどもわれと隔つる
誘ひ来ていつをはじめと
まよふらむこれを救はむ
いでにける説きおく法は
わかるれどころ一つを
たづねいる然はあれども
かせの音ふきそめしより
むかへても闇をてらせる

ひかりにて霧をいとはぬ
けぶりより八つのもも年
ひろめむと説きける事は
つたへ来てわが大和にぞ
おほひるめ本のくにとて
ことわりのかく顯はれて
ひさしくぞ國をまもらむ
たえせねばえぶの身ながら
うごきなく世を治むべき
伊勢の海にひろへる玉を
手にまかせ吹く風ふる雨
にぎはひて萬代ふべき
ゆたかなるべき

つきならず鶴のはやしの
すぎてこそまことの法は
するつひに三つのくにぐに
とどまれるあまねく照す
まきばしら造りもなきぬ
やまどりのおのれと長く
かためにて代代を重ねて
このままに悟のくらゐ
しるしとて清きなきさの
みかきもり潮のみちひも
時しあらば民のかまども
あしはらの瑞穂の國ぞ

世世たえず法のしるしを傳へきて普くてらす日の本の國

後宇多天皇 嘉元仙洞御百首

春二十首

立 春

いとどまた民やすかれとおもいはふかな我が身世にたつ春の初は
霞

春きぬと霞みにけりな山のはの緑もうすく今朝はみゆらむ
春の色や空にみつらむ淺緑かすまぬかたもあらじと思へば

鶯

時しあれば谷より出づる鶯によをたすくべき人をとばばや

春 雪

嘉元仙洞御百首

空にのみ散りて亂るる淡雪の消えずば花にまがひはてまし

若菜

春あさき飛火の野守つげすとも雪まの若菜まづや摘ままし

梅

梅の花ありとや風のつげつらむ軒ばをとめて人のたづぬる
白妙のいろはまがひぬ淡雪のかかれるえだの梅のはつはな

柳

悲しともたれかはいはむ山姫の春にそめたる青柳のいと

春雨

いづこをも限らぬものか春雨に民の草葉のめぐみあまねく

歸雁

雁がねの歸るをくるとみ越路や花なき里の春はまつらむ

花

吹く風もをさまれと思ふ世の中にたえて櫻をさそはずもがな
さくら花をのへやいづこおしなべて空にたなびく春のしら雲
いにしへの春をぞしたふ今のよの花になれぬる人のこころに
鶯のなく音もたえずをしむともうつろふ花をえやはとどめぬ
なべて世は春の心ものどけきにうつろひやすく花のちるらむ

春月

ながむればそこはかとなき霞む夜の月こそ春のけしきなりけれ

藤

紫の庭とぞみゆる藤の花飛香にほひてさけるあたりは

山吹

ちる花の形見もよしや吉野川あらぬ色かにうつるやまぶき

暮春

かくしつ年へぬれど今更にくれぬと思へばをしき春かな

夏十首

卯花

夕暮のまがきに咲ける卯の花のやぶしわきてや月のさすらむ

郭公

時しありて鳴けばこそ人にまたれけれうづきになれば山時鳥
時鳥ひとをわきてや鳴きつらむおなじ里にもつれなかりけり
短夜の有明の月はつれなきに待ちあへぬ空になくほととぎす

夏月

夕づく日よそに暮れぬる木のまよりさしそふ月の影ぞ涼しき

五月雨

限あれば今いくかありて晴れななむ八重雲ふかき五月雨の頃

廬橘

誰れとなくその古の戀しきに風なつかしき軒のたちばな

螢

よる光る玉とぞ見ゆる水くらき蘆べの波にまじる螢は

夕立

すぎにけり軒の雫は残れども雲におくれぬ夕立の雨

納涼

夏衣うすき袂に吹く風のめにみえぬ秋やいまかよふらむ

秋二十首 一首開

初秋

移りゆく日數ならでもしられけり秋とおぼゆる風のけしきは

七夕

七夕の年の逢瀬の水上はかよふうきぎもあらしとぞ思ふ

露

空にしる秋の哀の涙とてこの頃つゆはおくにぞありける

萩

萩原や風のままなる夕暮は誰れきけとなき音やたつらむ

薄

うちなびき野への薄におく露は緑のいとにぬける白たま

秋夕

あはれさはいづれなるらむ身にしむも夕と秋とわきてながめむ

蟲

蟲のねもみだれぞまさる秋風のみにしむ暮のあまたへぬれば

鹿

春日野やつまこひかぬる霧の中にわれもこもりて鹿のなくらむ

初雁

秋はまたあはれやあさき初雁の涙のつゆもおきあへぬまに
月

すまの蟹のもしほの煙たたねども空にとまらですめる月影
あくがるる心は空にさそはれてぬる夜すくなき秋のよの月
秋のよはながしともなく月影のかたぶく暮はをしき空かな
秋の空にあまねき月をあふぎみて我が世を照す影と頼まむ
今もなほかしこき影ぞあきらけき隈もあらずな月讀の神

搦衣

此のころは麻のさごろもうつたへに月にぞさねぬ秋のさとびと

霧

たちのぼるせせの河霧あともえて波にやどれる月のさやけさ

紅葉

露霜のおきつしら波たつ田山もみちの錦そめぬまぞなき

秋にあへず移ろふ頃は常磐なる松をもみせぬ嶺のみちば

九月盡

けふといへばとまらぬ秋のならひこそあかすも惜む情なりけれ

冬十首

初冬

ことしげく人目は枯れぬ宿なれどさびしき冬となれる頃かな

時雨

定なき雲のまよひに知られけりしぐるる空はかみな月とは

落葉

秋の色と残る形見もとどまらで軒もあらはにちる木の葉かな

冬月

おく霜の色もひとつに冬の月よさむになれば影ぞこほれる

霰

風さむみ空は雪げになりそめてかつがつ庭にちるあられかな

雪

都には風のたよりにかつちりて外山につもるけさのはつ雪

白妙の色より外のいろもなし遠き野山のゆきのあさけは

いづれをか花ともわかむ白雪の積らぬ木木はあらじと思へば

千鳥

よる波もひとむらすぎて音たつる松かげながらゆく千鳥かな

歳暮

惜めどもくるるはやすく行く年のなどひとことの身にとまるらむ

戀二十首

初戀

嘉元仙洞御百首

苗代の山田のたごの裾ならでおもひたつにもぬるる袖かな

忍戀

つれなさはまつに悲しき秋の風色にはいでそふきしをらむ
いかにせむ岩間がくれの谷水もたぎつ心は音にたつなり

不逢戀

身をくたく涙の玉の緒をたえてわが片絲のあはでくるしき
つれなさの限をせめて知りもせば命をかけてものは思はじ
いかにして夢を現に思ひなさむ逢ふをまことの一夜ぞとだに
逢ふことのかならずかたみ契るとも雲なきよそに猶頼むなる
いとどまたしなむ命ぞをしまれぬ身をかへてだに契ありやと

待戀

たのめしはけふぞと思ふ日かげより夕暮の空は猶ぞくるしき
忘ればや頼めしほどの月影もありしに似たるまつよひの空

初逢戀

戀ひしなばくやしかるべき契かないのちぞ人のなさけなりける

曉別戀

逢ふたびにこれや限の鳥のねと思ふもいとどうらめしき哉

逢不遇戀

命をば逢ふにぞかへし同じよに猶ながらへて物思へとや
等閑に一夜ばかりとかこちしを猶つれなさにたち歸りつつ
朽ちねただ同じ涙の袖のいろを又もみすべきたのみなき身は

忘戀

うき身こそ忘るる草の種ならめ人のこころを何とうらみむ
空にのみありし月日は廻りきて思ひもいづる言の葉はなし
いかなれば誰れもうきよの人心わすらるる身の忘れざるらむ

恨戀

身のうさは思ひしれども立ちかへり人の契のうらめしき哉
恨みわび涙にくれぬ今日もまたまちし夕の空はそらにて

雑二十首

曉

遠近のとり八聲もあけゆくにかすかに鐘はうちすさびつつ

松

誰れしかも松の心にたぐへなむ我れにあひおひの身をあはせつつ

竹

色かへぬ友とぞたのむこの世には心むなしき庭のくれ竹

山

すたれても今いにしへに歸る山わがよのかひもあるよしもがな

河

よしの河よしとは誰れかいは波のたかき昔の道したへども

橋

いにしへのながらの橋のはし柱くちてもよよのためし残さむ

關

人心きよみが關の世なりせば道のゆききるときぞしらまし

旅

歸るさはいかがおぼえむ行末も心すすまぬたびの空かな

ゆきすぐる岩のかけ道あときえてやがてぞ埋む八重の白雲

海路

いかにして人も通はむわたの原舟とかせとのたよりならずば

山家

み山べやまたもすむべき宿しめて世のうきたびの慰にせむ

尋ねばやいかなる山の奥の庵によにかくれたる人や住むらむ

田家

わが庵を頼みやすらむますらをがおのれはもらぬ秋の田の面は

述懐

ふして思ひおきても歎く世の中におなじ心とたれをたのまむ
こぎ出でし空しき船のよるべなみあるにまかせて世を渡る哉

夢

なべてよも有るをあるとは思はねど夢てふものはかながるらむ

神祇

ちはやぶる七代五代の神代よりわが葦原に跡をたれにき

釋教

まどかなる八月のつきの大空に光となれるよもの秋ざり

祝

今もかも天の日嗣のたえせねば限もあらしよよのすべらぎ
樛の木はいやつぎつぎに傳ふべき天の位は神のまにまに

後宇多 皇后始子内親王御歌

花の歌の中に新後撰集

あだにちる程をもまたで櫻花つらくもさそふ春の風かな

永福門院中宮と申しける時五月五日菖蒲の根

にそへて「かけて見よ君に心の深き江に引ける

かひなき浮根なれども」と奉られける御返し同

君がよのためしなるまで長き根にふかき心のほどぞ見えける

秋夕を玉葉集

花すすきはほすゑにうつる夕日影うすきぞ秋の深き色なる

題しらす観千載集

秋にあへぬ袖の涙や草葉までこのごろ茂き露となるらむ

後宇多天皇皇后御歌

搦ちあかす砧の音のかなしきは長きよさむの寢覺なりけり

秋の歌の中に玉葉集

なさけとや涙のかかる袖にしも長き夜すがら月やどるらむ

正安四年九月のころ紅葉を折りて内に奉らせ

給ふとて新集千載

知るらめやしぐれぬさきのもみち葉は心の色のそむる千入を

題しらす新集後撰

つれなくもなほ逢ふことをまつ鳥や小島のあまと袖はぬれつつ

戀の歌の中に同

いかにせむつらき限をみてもまた猶慕はるる心よわさを

忍戀の心をよませ給うける玉葉集

忍ぶとも遂に色にやあらはれむ常には物を思ふ身なれば

戀の御歌の中に同

夕暮はかならず人を戀ひなれて日もかたぶけばすでに悲しき
ながむらむ人の心も知らなくに月をあはれと思ふ夜はかな
思はじと思ふばかりは叶はねば心の底に思はれずなれ
何ごとのかはるとなしに變りゆく人の心のあはれ世の中
逢ふたびにこれや限と覺えしをげにありはてぬ中となりぬる

夕戀同

泣き歎きさも人こひてながめしと思ひいでてよ夕暮のそら

別戀を續集千載

行末の深きちぎりもよしやただかかる別の今なくもがな

後朝の戀の心を同

鳥のねにおきわかれつるきぬぎぬの涙かわかぬ今朝の床かな

寄月忍戀を新集千載

人しれぬよはの思の通はずはおなじ寐覺の月をみましや

後宇多天皇皇后御歌

龜山殿にて山家のころを集玉

峯のあらし麓の河の音をのみいつまで友とあかし暮さむ

法皇六十にみたせ給ひけるに壽命經供養せら

れけるついでに銀の杖奉るとて同

つく杖にむそちこえゆく今年より千歳の坂の末ぞひさしき

雑の御歌の中に同

うれしはや憂世の中のなぐさめや春のさくらに秋の月かけ

惜むともながかるまじき命もて世をとにかくに歎くはかなさ

夢をよませ給うける同

ありて過ぎ見えてさめぬる後はただ現も夢もかはらざりけり

旅のころを續千載集

暮ひきてまだふみなれぬ山路にも都にて見し月ぞともなふ

述 懐 同

なべて世にをしむ命もをしからず斯くてうき身の年を重ねば

後深草院かくれ給ひての又の年の春伏見院へ

梅の花を折りて奉らせ給ふとて風雅集

故郷の軒端に匂ふ花だにもものうきいろに咲きすさびつつ

後深草院のかくれさせ給ひけるに御覽

物をのみ思ひねざめにつくづくと見るもかなしき燈火の色

春きてし霞のころもほさぬまに心もくるる秋ぎりのそら

去年の秋後深草院に別れ給へるにうちつづき

今年山行幸記は龜山院のかくれさせ給ひければ山行幸記

うきはただこども今年も秋ぞとよさが野の嵐深草のつゆ

御製集 第二卷終

大正四年七月十日印刷
大正四年七月十三日發行

(岡田三郎助意匠) (御製本)

御製集 第貳卷

[非賣品]

版權所有



編纂者兼
發行者

列聖全集編纂會
東京市麴町區內幸町一丁目三番地

右代表者

中塚榮次郎
東京市赤坂區青山高樹町十二番地

印刷者

井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所

電話新橋一二七番
振替東京二九八八番

列聖全集編纂會

328
378

終